



Title	非可換2-トーラスの微分相写像
Author(s)	小高, 一則
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36491
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	こ	だか	かず	のり
	小	高	一	則
学位の種類	工	学	博	士
学位記番号	第	8 5 3 7	号	
学位授与の日付	平	成	元	年 3 月 15 日
学位持与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	非可換 2-トーラスの微分相写像			
論文審査委員	(主査)			
	教 授	竹之内 脩	教 授	永野 克彦
	(副査)			
	教 授	永井 治		

論文内容の要旨

A_θ を非可換 2-トーラスとし、 u, v を A_θ の unitary elements とし、 $uv = e^{2\pi i \theta} vu$ を満足するものとする。このとき u, v は A_θ の生成元となる。

また、 A_θ^∞ を 2 次元トーラスから A_θ への Canonical action に関して smooth な elements からなる A_θ の dense $*$ -subalgebra とする。

さて A_θ の自己同型写像 α が次の条件を満たすとき、 α は微分同相写像であるという。

$$\alpha(A_\theta^\infty) = A_\theta^\infty$$

A_θ の微分同相写像には、次のような canonical な例がある。

- 1) 任意の unitary element $W \in A_\theta^\infty$ に対して、 $\alpha \in \alpha(\chi) = W^*$, $\forall \alpha \in A_\theta$ と定める。
- 2) 任意の $s, t \in \mathbb{R}$ に対して、 $\alpha(s, t)$ を $\alpha(s, t)(u) = e^{2\pi i s} u$, $\alpha(s, t)(v) = e^{2\pi i t} v$ と定める。

- 3) 任意の $g = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in \text{SIL}(2, \Pi)$ に対して、 αg を $\alpha g(u) = u^a v^c$, $\alpha g(v) = u^b v^d$ と定める。

1986年に Elliott はこのことについて次のようなことを示した。

θ が generic なとき、 A_t の任意の微分同相 α に対して、 $\exists n \in A_\theta^\infty : \text{unitary}, \exists s, t \in \mathbb{R}, \exists g \in \text{SL}(2, \Pi)$

$$s, t, \quad \alpha = A(W) \circ \chi(s, t) \circ \alpha g$$

そこで、本研究では、 e が generic ではないときに、微分同相写像が、どのようなになっているかを調

べることにした。そして次のような結果を得た。

$\exists \theta$: generic でない無理数, $\exists \alpha : \text{Ag}$ の微分同相写像

$$s, t, \alpha \neq \text{Ad}(W) \circ \alpha(s, t) \circ \alpha g$$

for $\forall w \in A_\theta^\infty$ unitary, $\forall s, t \in \mathbb{R}$, $\forall g \in \text{SL}(2, \mathbb{R})$, 証明は次のような微分同相写像 α を考える。

$$\alpha(u) = e^{2\pi i g(v)} u, \quad \alpha(v) = v$$

ここで $g \in \text{SL}(2, \mathbb{R})$ で実数値をとる。

上のような α を考え、次のような条件を満足するように、 θ と g とを定めればよい。

$$\Gamma(\alpha) = \Pi$$

$$\widetilde{\tau}_*(K_0(A_\theta \rtimes \alpha \Pi)) = \Pi + \Pi \theta.$$

ここで $\Gamma(\alpha)$ は α の Connes spectrum $\widetilde{\tau}_*$ は、 A_θ の unique tracial state より定まる $K_0(A_\theta \rtimes \alpha \Pi)$ から $\mathbb{R}$ への homomorphism。

論文の審査結果の要旨

C^* 環における微分同相写像の形をきめる問題は困難な問題であり、いままでいくつかの具体例についての結果が与えられているにすぎない。そのうちで、注目を集めているのが、本論文の非可換 2-トーラスの場合である。

非可換 2-トーラスは、1-トーラス T に対し、 $t \mapsto \exp(2\pi i \theta t)$ (ただし、 θ は無理数) という作用のもとに構成される。ここで、 θ がリュウヴィル型の無理数でない場合、微分同相写像はある標準形をもつことが近年確立され、一般の場合にもこの標準形が通用するのではないか、といわれていた。著者はこれに対して、そのことの成立しない反例を構築したものである。

微分同相写像には、いくつかの典型的な形のものがあり、標準形は、そのうちの3種類のものの結合の形で示される。著者は、リュウヴィル型無理数を適当な形でつくり、その θ によって構成される非可換 2-トーラスにおいては、この3種類のものとは異なる他の形の典型微分同相写像のうちに、この標準の形には表しえないものがあることを証明したものである。証明の手段には K 理論が用いられ、この方法についても、これは K 理論の一つの活用之道を示したものであるとして評価される。

以上、本論文は、 C^* 環の微分同相写像をきめるという、極めて魅力的なしかし困難な問題について重要な知見を与えており、学位論文として価値あるものと認める。